

さけ・ます増殖振興事業調査

(要 約)

中田 健一・田村 真通

この調査は、さけ資源の効率的増大を目的とし、漁業振興課、水産試験場、内水面水産試験場、水産増殖センターがそれぞれ調査項目を分担して行った。当センターでは、60年度に引き続き、回帰率向上調査・親魚回遊経路調査を担当した。なお、詳細については、「昭和61年度さけ・ます増殖振興調査事業報告書」(昭和63年3月、青森県)で報告した。

1. 回帰率向上調査

(1) 陸奥湾の環境調査

- ① 既往資料、海況自動観測、浅海定線調査等により、月別概況(4~6月)をとりまとめた。
- ② 湾内において動物プランクトン調査を行い、定置で混獲された稚魚の胃内容物と比較した。
- ③ 4~6月の湾内全般の表面水温をみると平年並か、若干低めに推移した。
- ④ 61年度は、前年に比べると動物プランクトンの出現量が若干減少した。4~6月期を通じ、橈脚類が卓越している。
- ⑤ 期間を追って胃内容物の出現状況を見ると、4月下旬は橈脚類・端脚類、5月は稚仔魚(イカナゴ)主体の摂餌で、5月中旬になると枝角類が増えてくる。

(2) サケ稚魚標識放流調査

- ① 陸奥湾でのサケ稚魚の放流適期を確めるため4月1日、野辺地川より10万尾の標識放流を行った。
- ② 野辺地川河口域において、4月1日~11日までの間に、計25尾の標識魚が再捕され、放流後10日間ほど河川生活を送ることが確かめられた。
- ③ 湾口部において稚魚入網の多いのは、5月10日~5月末までである。これらの稚魚の肥満度は、5月22、23日以降低下するので、5月10日~20日頃までに湾外に到達するように河川放流時期を設定する必要があるということが昨年、一昨年の調査に引き続き確かめられた。

2. 親魚回遊経路調査

(3) 放流河川における調査

- ① 野辺地地区の回帰は9月から翌年1月までみられ、沿岸269尾、河川1,015尾の計1,284尾(対前年比49.2%)であった。
- ② 年齢構成は、4年魚中心で、以下5年魚、3年魚、2年魚、6年魚の順で多く、それぞれ66.3%、20.8%、12.3%、3.0%、3.0%であった。
- ③ 回遊親魚のほとんどがブナ毛であった。